

2024（令和6）年度

小論文

10：30～12：10

教養学部

地域社会学科

一般選抜(中期日程)

注意事項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら、受験番号を解答用紙の指定欄に記入しなさい。
3. この冊子は1～6ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見出した場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚あります。1枚は清書用、もう1枚は下書き用です。提出は清書用1枚だけです。
5. 解答は必ず解答用紙の指定欄に横書きで書きなさい。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちにおいてください。
7. この冊子と下書き用の解答用紙は、持ち帰ってさしつかえありません。

【設問】 以下の文章は、「センシュアス・シティ＝官能都市」という都市の魅力の新しい価値観を論じた文書の終わりの部分です。課題文を読んで、後の問いに答えなさい。指定された字数に句読点は含みません。

【課題文】

ここまで、センシュアス・シティの意義を語ってきましたが、もちろん、世の中にはそういう考え方に対する反論もあるでしょう。

ここで取り上げたいのは、批評家・東浩紀氏の主張に代表されるような考え方で

「こういう話では、街の個性が市場主義で覆われて消滅した、という図式が立てられることが多いんだけど、僕はむしろここでは、街の個性が衝突している対象は、ポストモダンの多様性肯定の論理だと思うんです。1990年代後半の秋葉原がそうだけど、たしかに、ある特定の趣味の共同体しか受けつけない街作りをやるならば、面白い街はできる。けれど、その街をどう改良するかと言われたら、いくらそれが面白くても、現代ではその特殊性を伸ばそうとは言にくい。ポストモダン社会は多様な人間集団の共生を公準としている。したがって、街には老人も子どもも来られなくてはならないし、いろいろなひとが楽しめなければならない。だとすれば、やはり清潔で安全な『人間工学的に正しい』街区を作るしかない。そう考えたら、あとは細部に金をかけるかどうかぐらいで、全体としては似たような街ができるに決まっている」

（東浩紀・北田暁大『東京から考える』、2007年、NHK ブックス、194ページ）

この東氏の指摘は、都市の現実を的確に言い当てていると思います。「ボール遊び禁止」「花火禁止」といった禁止事項だらけの公園などは、「不特定多数の平等」の力学が招いた結果です。また、全国に展開されている巨大ショッピングモールは均質化の象徴のような存在ですが、地方都市や郊外では、それが最大の娯楽施設として人々に歓迎されています。そういう現実を見れば、均質化した都市空間こそが現代社会のリアルだという分析には、確かに説得力があります。

一方で都市には、各自治体が直面している人口減という切迫した状況があります。地方都市郊外でのショッピングモールを起点とした住宅地開発の背景には、自治体間での人口と雇用の争奪戦という切実な動機が働いているのです。都心部における再開発事業も、郊外におけるショッピングモール誘致と宅地開発も、マーケティング的に表現すれば、いずれも市場全体でのパイが縮小していく中でのシェア争いの側面があると言えるでしょう。

問題は、人間工学的に「正しい」やり方が、マーケティング的には「誤り」になる場合もあるということです。それどころか「正しさ」が、時に衰退した都市に深刻な一撃を加えることすらあると思います。

なぜなら、判で押したように同質化したまち、特徴のないまちは、他の多くの競争相手の間に埋もれ、いずれ「より便利な」「より手頃な」住宅地に、「より大きく」「より新しい」ショッピングモールに人を奪われるだけだからです。

(中略)

東氏が挙げている、秋葉原というまちであれば、確かに「特殊性を伸ばそうとは言いにくい」という断定に妥当性があるように感じます。アニメや電化製品、メイドに溢れた「特殊性」は、特定の趣味人だけが享受可能なまちの特色だからです。

武蔵小山の暗黒街(出題者注1)や三軒茶屋の三角地帯、新宿のゴールデン街も、ある意味で同様でしょう。昼間から酒臭く怪しい人がいるような猥雑で危険な場所なんて嫌だ！ という住民感情は容易に想像できます。

一方、閑静な高級住宅街が「環境を守ろう。もっと良くしよう」と言えば、反対意見は少ないように思います。本来であれば、閑静な住宅街でだけ通用する「特殊性」のはずですが、これは「特殊」とは呼ばれません。

「サブカル都市下北沢を守れ！」は「高級住宅地・青葉台を守れ！」と同じだと東氏も認めるように、猥雑な横丁も、閑静な高級住宅地も、整然とした郊外ニュータウンも、湾岸エリアのタワーマンション群のまちも、特定のライフスタイルや趣味の共同体に支持されているにすぎません。しかし都市計画の思想の中には厳然と、「正しい」特殊性と「正しくない」特殊性という、恣意的な了解があるのです。

②

では、不特定多数のみんなのための「正しい」まちの改良、すなわち再開発計画は、本当にみなが合意できているのでしょうか。

(中略)

品川区が武蔵小山近隣住民を対象に取ったアンケートによれば、まちの将来像として超高層マンションが建ち並ぶまちを求めている住民は、ごく少数だったとのことでした。

武蔵小山の再開発の根拠ともなっていたのが、密集市街地の防災対策ですが、実は解決法は高層化だけではありません。対象地域の建物の耐震改修と不燃化改修を進めればいいのです。今回の武蔵小山の再開発には57億円の補助金が出ていますが、おそらくその半分程度の費用で、対象エリアの建物すべての耐震改修と不燃化改修が行えるでしょう。

もし最初のプランがデベロッパーから提出された時に、その是非を巡って地域住民が住民投票なりワークショップなりをした(やる余地があった)とすれば、仮にそれが多様な意見の妥協的産物であったとしても、横丁を一掃する当初の計画で140mのタワーマンションの開発計画は果たして合意されたかどうか……。

大阪のなんば駅付近に、法善寺横丁という飲食店街があります。小説『夫婦善哉』の舞台となったことで有名なまちですが、作者の織田作之助は、この横丁を「大阪の顔」だと言って大阪を訪れる友人を案内していたそうです。

法善寺横丁は、水掛不動尊(法善寺)を中心とする、長さが80mくらいの小さな横丁です。かつては寄席が2軒あり、多くの芸人にも愛されてきました。

ところが2002年、解体途中の道頓堀旧中座で起こった火災が、隣接する法善寺横丁の19店舗に延焼。その翌年、復興中だった横丁内の天ぷら屋からの出火でさらに17店舗が焼けてしまいました。ただ、現行の建築基準法に則って新築すると、幅員が2.7mしかない路地は広げざるを得ず、もとの風情は失われてしまいます。

それはいけないと、古くからの法善寺横丁の情緒あるまち並みの再興を求める気

運が高まりました。関西の文化人や芸能人も声を上げ、市民 30 万人の署名が集まったのです。

そこで法善寺横丁では、「連担建築物設計制度」を使い、区域全体を 1 つの敷地として扱うという裏技に出ました。路地を建物内の通路とし、通路に面する建物を耐火構造にすることで、路地の風情を残しつつ地域の不燃化に成功したのです。

ファサード(建築物の正面)は従前の原型を尊重しつつ、意匠的なブラッシュアップが施されました。結果、しっとりとした石畳の路地に質の高い飲食店が集まり、法善寺横丁は地元大阪の人だけでなく、観光客にも人気の繁華街になったのです。

大阪市淀川区の阪急十三駅前の飲食店街「しょんべん横丁」は、2014 年 3 月の火災で 39 店舗を焼失しましたが、法善寺横丁を復興させた連担建築物設計制度を使って、元のまち並みを再現する方向で議論・調整が続いています。もし武蔵小山の暗黒街に、あるいは三軒茶屋の三角地帯にも、市街地再開発計画のプランと同時に、法善寺横丁の例が別の可能性として提示されていたら、今ごろは一体どうなっていたでしょう。

補足しておく、武蔵小山の再開発事業に投入された補助金の 57 億円という金額は、当初の総事業費 336 億円の 17 % にあたります。これは一般的なデベロッパーがマンション開発をする際の粗利益率に相当します。再開発事業で道路などの公共設備が整備されますが、行政がデベロッパーの粗利益を保証したうえで再開発が行われている格好です。大量の高級マンションが売れるということは、それだけ収入の高い世帯が大量に住むことになるので、行政にしてみれば、より多くの住民税と固定資産税を期待することができます。防災という大義名分の陰には、このあたりの経済的な思惑もあることは知っておいたほうがいいでしょう。

改めて考えます。都市はいったい誰のものでしょうか。

行政のものではありません。政治家のものでもありません。もちろんデベロッパーやゼネコンのものでもありません。たとえ法的な権利は有しているとしても、一部の地主が好き勝手にしているものでもないでしょう。少なくとも、投資マネーのものであるべきでは、断じてないのです。

焼畑農業的な不動産開発によってまちの個性が失われ都市が均質化していく流れ
③ を、ポストモダンの宿命などと受け入れるべきではないと思います。

都市計画は、そこに生きる(=都市を使う)人間を中心に考えるべきだからです。

〔出題者注1〕 武蔵小山の「暗黒街」について、筆者は本書の中で次のように述べている。

武蔵小山駅の東口、目黒線の線路跡とパルム商店街とに挟まれたこの一帯は、新旧160近い飲食店が軒を連ねる武蔵小山飲食店街「りゅえる」というまちだ。何箇所かある路地の入り口には、柔らかな書体の看板が掲げられている。

フランス語で小路を意味する「りゅえる」は、実は2012年に命名された新しい名前で、地元でこのまちをそう呼ぶ人はいない。地元の人、特に年配者は、親しみを込めてこのまちを「暗黒街」と呼ぶ。

2006年に目黒線の駅が地下化された頃から若い人向けの店が増え、毎夜若者で賑わっているものの、暗黒という名前が示すように、このまちにはダークな記憶がある。地元生まれのある店主によれば、子供の頃は近寄ってはいけないと言われた場所だったそうだ。

吉祥寺のハモニカ横丁や三軒茶屋の三角地帯など、他の多くの駅前横丁と同様に、このまちの原型は戦後の焼け野原に興ったヤミ市のバラック街にある。衣料品や日用品など物販系のお店が多かったパルム商店街エリアに接して、この一帯は、もつ煮やうどん、おじやを食わせる露店が並ぶ飲食ゾーンだったのだろう。

ヤミ市という場所柄、もともとはテキ屋がまちを仕切っていたはずである。スナック街になってからは、ヤクザ者も出入りしていたのだと思う。ポッタクリや、酔客のケンカも多かったのかもしれない。

そのようなあやしい闇の残り香が、今では若い女性が1人でも飲みに行けるほど安全なこのまちの、ちょっとしたスパイスになっている。

出典：島原万丈 + HOME'S 総研『本当に住んで幸せな街 全国「官能都市」ランキング』(光文社、2016年)。出題にあたって、一部修正した。

- 問 1 下線部①「人間工学的に『正しい』やり方」について。「人間工学的に『正しい』やり方」とはどのようなやり方か、またそのやり方によるとまちはどうなると筆者は言っているかを説明しなさい。(100字以内)
- 問 2 下線部②「『正しい』特殊性と『正しくない』特殊性」について。筆者のいう「『正しくない』特殊性」について、課題文中の語句を用いて説明しなさい。(100字以内)
- 問 3 下線部③「焼畑農業的な不動産開発によってまちの個性が失われ都市が均質化していく流れを、ポストモダンの宿命などと受け入れるべきではない」とはということか。筆者の主張を説明した上で、その主張についてあなたはどうか考えるか論じなさい。(600字以内)